

『バブリオス寓話集』 試訳（二）

松 村 恒

何かを望んでも労なくして得られるものではありません。

望むものを苦勞して手に入れると、

その時は、ふざけ戯れることが適當となります。

10 アプロディテーと端女

醜く性惡の自分の端女に惚れてしまったある男、

求められるものは何でも進んで与えておりました。

端女は黄金で着飾り、

脛には真紅の柔布を引き摺り、

女主人とはことあるごとに諍を起こしておりました。

女はすべてはアプロディテーのお蔭によると思い、

燈明を以て崇敬し、毎日犠牲を献げ、

請願し、嘆願し、恩寵を願いました。

ある時とうとう二人が寝ている時に、端女の夢の中に現れて来て言ったのです。

「そなたを美しくしたと思って私に感謝するではない。

そなたを美しいと思っているその男に腹をたてておるのじゃ。」

[醜いものを美しいものであるかのように喜ぶものは誰でも
神に呪われ、心がねじ曲がっているのです。]

11 火持ち狐

葡萄と農園の敵である狐に
新手の罰を与えてやろうと思ったある男、
しっぽに麻布を結びつけ、火をつけてから
放ちました。これを見ていた神様は、
悪作をした男の畑へと
火のついた狐を導いたのです。折しも作物の稔る季節で
穀草はよく稔り、大きな収穫の見込みがありました。
男は野良仕事の労苦が無くなってはと嘆きつつ後を追いつけましたが、
豊饒の女神は彼の穀物をもたらしことはありませんでした。

人は心静かにして、怒り過ぎることがあってはなりません。
怒りには報いがありますから、私はそれを用意するのです。
怒りんぼには損害がもたらされました様に。

12 小夜啼鳴と燕

畑を遠く飛び超えた一羽の燕、
人里離れた森野中、悲痛に泣く
小夜啼鳥を見つけました。小夜啼鳥は
不慮の死を遂げた雛のイテュスのことを嘆いているのでした。
歌声から二羽は互いに識り合い、

近くへと飛び寄り、お喋りを始めました。

燕が言うには、「親愛なるお仲間さん、生きておいでかしら。

トラキア以来あなたには今日初めてお目に掛かる訳ですが、
過酷な運命がいつも私達の中を裂いていましたわね。

[娘時代から私達って互いに離れ離れ。]

さあ畑とか人間の家へいらっしゃい。

私達は一緒に食べ、お友達として暮らすのです。

そこで獣のためではなくって、お百姓のために歌いましょうよ。

[屋外の森を去って、人間の傍で

私と同じ家同じ屋根の下でお暮らしなさい。

どうしてあなたの背を夜露が濡らし、

太陽が焦がすのですか。すべてがあなたの身を摺り卸しているではありませんか。

さあいらっしゃい。あなたは音楽が上手ですから。面倒をするには及びません。]

小夜啼鳥が鋭い声で答えて言うには、

「人気の無い岩場に私を住まわせておいて下さいな。

どうか私を山の叢林から連れ去らないで。

アテネ以来あたくしは夫や街を避けているんですもの。

あたくしにはすべての家、人間との交わりは

争い混乱を引き起こす苦痛の種ですから。]

[悪い運命にも何らかの慰めはあるものです、

智恵の言葉、音楽、群からの逃避といったような。

しかし、一旦質素になった者が、その人を繁えていると見做す人達と一緒に住むならば、それは常に苦痛なのです。]

13 百姓と鶴

お百姓が畔溝に細い網を仕掛けて、

播いた種の敵である鶴を捕まえました。

足を引き摺りながら鶴がお百姓に懇願しました。

(とういうのも鶴と鶴も捕まえられていたから。)

「僕は鶴じゃないんです。種を壊したりはしません。

僕は鶴なんです。体の色を見ればわかるでしょ。

鶴って翼のある生き物のうちで一番誠実なんですよ。

それに僕はお父さんを養って看護しているんです。」

お百姓が言うには、「おい鶴、俺はお前がどんな生活で喜んでるか、

知らないね。俺が知っているのは、

お前を俺の仕事を邪魔する鶴と一緒に捕まえたってことさ。

だから一緒に捕まった奴らと共に死ぬんだな。」

[悪い仲間と交わると悪い仲間と同じように嫌われてしまうのです。

たとえ君が近くの人に悪作をしなくても。]

14 熊と狐

熊が人間を異常に好んでいることを自慢しました。

とういうのも人間の死体を引き摺ったりしないと広言するからです。

そこで狐が言いました。「あっしが選ぶんでしたら、

死んだ人間を引き摺っても、生きてる奴にはさわりませんがね。」

生きているうちに害する者に死んだ私を嘆かせてはなりません。

15 アテネ人とテーベ人

あるアテネの男がテーベの男と

一緒に旅をして、当然のことながら語り合いました。

話題は英雄についてのこと迄に及びましたが、

互いに沢山喋っても決定的な結論へは到りませんでした。

最後にテーベ人はアルクメーネーの息子（＝ヘーラクレース）を

人間の中でまた神々の中で最も偉大な者として讃え歌いました。

アテネ人がもっと優れたものとして挙げたのは

テーセウスで、神の運命を

実際引き当てたのです。これに対しヘーラクレースが引き当てたのは奴隷の身分でした。

「アテネ人は」言葉の上では勝ちました。彼はお喋り上手の雄弁家でしたから。

相手はボーイオーティア人の様で、口の言い競いでは

敵わないものですから、粗野な技巧で言いました。

「もういいよ、君の勝ちだ。よって

テーセウスが我々に対して、ヘーラクレースがアテネ人達に対して怒りますように。」

16 期待外れの狼

田舎者の乳母が泣いている赤ちゃんを

脅しました。「静にして。狼にあげちゃうわよ。」

狼はこれを聞いて、老婆は本当にそう言っていると
思い、今にもごちそうにありつけると待っていました。
とうとう夕方になって赤ちゃんは眠りにつき、
狼はお腹が空いて、ただ欠伸をするばかり。
叶えられない望みに待った拳句、家に戻ると
狼の奥さんが尋ねました。
「どうしていつものように何か持って帰ってこなかったの。」
狼は答えました。「どうしてって、女を信用したら一体何ができるんだ。」

17 鳥追い猫

猫が家禽を捕らえるようと罾を仕掛け、
袋の様にして釘からぶらさがっていました。
蹴爪のある賢い鶏がそれを見て、
鋭い調子で嘲笑いました。
「これ迄多くの袋を見て知っているけど、
生きた猫の歯の付いたのはなかったなあ。」

18 北風と太陽

北風と太陽の間に言い合いが
起こったということです。どちらが旅している
田舎者の外套を剥ぎ取ることができるかと。
先ず北風がトラキアから吹く風のように吹きました。
力によって着ている人から服を奪ってやろうと考えて。
しかし旅人は服を放すどころか寒がって

全身の廻りに手で服の端をしっかりと握り
石の表面に背を寄り掛かせてじっと座っていました。
そこで太陽は先ずそっと顔を出し、
旅人を防風の寒さから解放して、
更にその後でそれ以上の暑さをもたらしました。
お百姓は暑くなると突然に
衣服を脱ぎ捨てて裸になりました。

こうして北風は「太陽と」競ったのですが敗れたのです。
この寓話は訴えます。「子供よ、穏やかさを求めなさい。
力づくで行うよりも説得の方がよく成功するのですから。」

19 狐と葡萄

葡萄の房が丘のふもとの黒い葡萄の木に
ぶら下がっておりました。色とりどりの一杯の房を
見て狐が何度も跳び掛り、
足で飛んで赤紫色の「房を」掴もうとしました。
というのもそれは十分に熟していて、取り入れに相応しいものだったから。
しかし頑張っても甲斐なく、触れることもできないので、
落胆にうちひしがれてこう言いながら去りました。
「あの葡萄はまだ青い。俺が思っていた程熟しちゃいねえ。」

20 ヘーラクレスと牛飼

牛飼いが村から車を曳いていましたが、
がらんとした谷間に落としてしまいました。

引き上げなければいけないのに、何もしないでつつ立って、
すべての神々の中で本当に崇拝し尊敬する唯一の
ヘーラクレースに祈るばかりでした。
神が彼の前に立って言いました。「車輪に手をかけよ、
牛を鞭打て。神々に祈ってよいのは
自分で何かした時だぞ。そうでなければ祈っても無駄じゃ。」

21 牛と料理人

ある時牛達が料理人を殺そうと考えました。
それは自分達にとって具合の悪い知識を持っているからです。
牛達は集まって闘いに備えて
角を研ぎました。しかし彼らの中に
耕作の経験豊かな年長者がいて
言いました。「あの人達はわしらを熟練した手で
屠るんだよ。つまり苦しめることなく殺すのさ。
しかし技術のない未熟者の手にかかったら、
死〔の苦しみ〕は倍化するだろうて。料理人がいなくなったって
牛を殺すものはいなくなりはないぞ。」

〔目の前の苦しみを逃れようとする者は
もっとひどい状態に出会わないか見極めねばなりません。〕

22 中年男と二人の愛人

人生の中年を迎えてある男
(若くはないといっても、老人と言う程ではありませんが、

長い黒髪に白いものが混ざってきたのに心を悩ましていたのですが)

酒色に溺れて時を過ごしておりました。

男は二人の女を愛していました。一人は若く、一人は年配。

若い方の女は男が若く見えたらよいと願い、

年配の方は自分と同年代に見えることを望んでいました。

年頃の女はことあるたびに男の頭髮から

白く見えるもの引き抜き、

年配の方は黒く見えるものを引き抜きました。

こうしてそれぞれが男の毛を引き抜いて、

とうとうつるつろになった男をお互いに見せ合うということになったのです。

[アイソポースがこの寓話を語って教えることは、

女に溺れた男は哀れ、ということ、

女は海のように微笑みかけて、首を締めるものだから。]

23 泥棒を捕らえるより羊を失う方がまし

牛飼いが遠くの森迄

見失った角のある牡牛を探しに行きました。

そして山を徘徊する妖精に誓いを立てたのです。

[また羊飼いはヘルメス、牧神パンといった周りのものにも羊を] もし泥棒を捕まえられたら、羊を献げましょうと。

丘に登って見えたそのものは、獅子の餌食になった

美しい牡牛でありました。不幸な人は再び誓いを立てます。

もし泥棒から逃げる事ができたら、牛を献げましよう。
ここから私達が学ぶことは、
一時的に起こった苦しみから、
よく考えずに神様に誓いを立ててはいけないということでしょう。

24 太陽の婚礼と蝦蟇

夏に太陽の婚礼があり、
動物達は神様に対して陽気なお祭をとり行いました。
蛙達は沼池の歌舞を受け持ちましたが、
蝦蟇が押し留めて言いました。「僕達は
祝いの歌を歌ういわれはないよ。そうでなくて苦しみとなる心配事がある
よ。
というのは、太陽は一人でも泉をすべて乾上がらせてしまうのに、
結婚して彼と同じ様な子供を産んだら
僕らは悪いことを被らないですむだろうか。」

結局は全く喜べなくなるようなことを
多くの人々は非常に軽はずみに喜んでしまうものです。

25 兎が自殺を止めたわけ

兎達は生きることが出来ないと判断して、
皆暗い池の水に身を投げました。
というのも、生き物のうちで一番弱く、
精神は臆病で、ただただ逃げるばかりだと思ったからです。
しかし水が清く流れる池の近くに来ると、

岸辺にいる蛙の群が

身を縮こませて深い泥土の中に跳び込んだのを見て

了解したのです。一匹が勇氣を得て言いました。

「戻ろうよ。もう死ぬ必要はなくなった。

僕達よりも弱いものが他にいることがわかったんだから。」

26 百姓と鶴

鶴がお百姓の畑を食い荒らしましたが、

そこは極く最近小麦の種を播いたばかりの所でした。

お百姓は長い間空の投石器を振り回して

鶴達を怖がらせて追いやっていました。

しかし投石器は空中を狙うばかりなので

鶴達は終りには問題にしなくなり、遂には逃げなくなりました。

そこでお百姓は以前にしていた様にはせず

石を本当に投げて、多くの鶴を打ちました。

鶴達は畑を去り互いに叫びました。

「ピュグマイオスの地へ逃げよう。

この人間は僕らを単に驚かすだけではないようだ。

既に何かの行動を起こしているのだから。」

27 不評な魴

ある人が罾で魴を捕え縛って

窪地の水溜りで窒息させようとしてしました。

魴が言います。「何と好意を仇で返すのですか。

鼠や蜥蜴を捕えるのを手伝ったのに。」

これに対して人は言います。「誓ってお前に言ってやろう。お前は鶏達を皆絞め殺し、家中を荒らした。

お前は俺達を手伝ったよりももっと沢山邪魔をしたんだぞ。」

28 腹を膨らました蝦蟇

水飲みの牛が蝦蟇の子を踏み潰してしまいました。

母蝦蟇が戻って来て—そこに居合わせなかったのですが—

兄弟達にあの子はどこへ行ったのと尋ねました。

「死んじゃったよ、お母ちゃん。ほんのちょっと前に

四つ足のすごく大きいのが来て、

蹄で潰しちゃったんだよ。」母蝦蟇は腹を膨らまして

その生き物は大きさはこれ位かえ、と尋ねました。

子等は母親に言いました。「やめなよ。膨らましちゃだめだよ。

あれの様になる前に

途中でお腹が破けちゃうから。」

29 競争馬の老後

ある時老いた馬が粉引きのために売られ、

粉引き小屋につながれて、一晩中駆り立てられました。

ため息をつきながら言いました。「あの競馬場から

粉屋なんかのために心棒の周りをぐるぐると廻るゴールに到るとは。」

絶頂期の誇りの故に余りに思い上がってはいけません。

多くの人にとって老齢は労苦のうちに過ぎてゆくものですから。

30 売りに出されたヘルメース

ある人が大理石のヘルメース像を彫り、売りに出しました。
二人の人が買いに来ました。一人は墓標にするために
(というのも最近その人の息子が死んだから)、
もう一人は職人で神像として奉るつもりでした。
時間が遅かったので彫刻家は売らずに、
明朝やって来たら見せる約束をしました。
彫刻家が眠りに着くと
ヘルメースが夢の端に現れて
言いました。「よいか、わしは計りにかけられておる。
お前がわしを屍体にするか神様にするか、だからだ。」

31 鼠の指揮官

鼬と鼠が互いに争いましたが、
その闘いはいつも和解し難く、血を見るものでした。
鼬が勝ちましたが、鼠は敗北の
原因は、自分達には
秀れた指揮官がなく
いつも無秩序に危険に立ち向かっていることだと考えました。
それだから生まれ、力、
思慮に最も優れたもの及び戦いに巧みなものを指揮官として選ぶと
指揮官達は鼠を人間に倣って、部族、分団、本隊に
整備、区分けを行いました。
全軍が配置され集められた時に、

鼠は勇氣を得て鼯に挑みました。

指揮官達は粘土の壁の藁の小片を

額のとっぺんにつけて

率いていたので、他の多くの鼠とは皆極立っていました。

鼠達は再び敗退を帰し、

他の鼠達は穴に無事に逃げ込んだのですが、

指揮官達は穴の中に走り込むことができません。

頭の上に突き出た藁の小片が邪魔になったからです。

[彼らだけが隠れ家の前の場所で捕えられました。]

鼯はそれぞれ鼠の指揮官を傷つけた時、

勝利は鼯に、敗北は鼠にと確定しました。

この寓話は教えます。「危険なく暮らすには、

目立つよりも目立たない方がいいのです。」

32 鼯の花嫁

あるとき美形の人間の男に惚れてしまった鼯を、

願望の母である尊ぶべきキュプリス神が

姿を変えて人間の女にしてやりました。

それはそれは美しい女で、好きにならない者があろうかという程でした。

例の男も一目見て(今度は男が参ってしまい)

結婚することにしました。正餐が整えられたとき、

鼠がちょろちょろ走りでました。立派にしつらえられた

新婚の床より花嫁は跳び起きて後を追ったのです。

婚礼の祝宴はそこでおしまい。おかしくふざけて
愛の神は去ってしまったのです。もって生まれた本性には勝てないもので
すから。

33 鳥と智恵競べ

プレイアドスの沈むころは種播きの時期、
あるお百姓が小麦を耕したばかりの畑に播いて、
見張って立っておりました。というのもカアカア鳴く
鴉の無数の黒い集団と、
椋鳥が畑の種を駄目にしにやって来たからです。
お百姓には子供が空の投石器を持って
ついて来ました。椋鳥は慣れているものですから、
お百姓が投石器を渡すようにと言うのを聞いても、
石が打たれる前に逃げ去るのです。お百姓は
別の方法を思いついて子供に教えて
言いました。「いいか子供よ、わしらは鳥の
賢い一族に一泡吹かせてやらねばならん。奴らが来た
時に、わしがパンをよこせ、と言ったら、
お前はパンではなく、投石器をわしに渡すのだぞ。」
椋鳥がやって来て畑を啄みました。
お百姓が取り決め通りにパンをよこせと言っても、
椋鳥は逃げませんでした。子供はお百姓に石を一杯に詰めた
投石器を渡しました。お百姓は石を発射しました。
あるものは額を、あるものは脛を、

別のものは肩を射られて、畑から逃げました。

鶴が出会って起こったことを尋ねました。

鳥のうちの あるものが言いました。「人間という

悪い種族からお逃げなさい。あいつらは互いに

別のことを言いながら、別のことをする術を体得しています。」

[恐ろしい種族とは悪企みで何かをするものです。]

34 くいしん坊や

田舎者達がデーメーテールに牡牛を献げ

葡萄の平たい種を広く播きました。

それからお肉を置いた食卓と葡萄酒の瓶を用意したところ、

子供のうちの一人ががつがつと食べました。

牛の肝でお腹が膨れて

食べ過ぎのお腹で痛くなって家に帰りました。

母親の柔らかい腕に倒れ込み、吐いて

叫びました。「ついてないんだ、死にそうだよ。

お腹ん中全部がちくちくするよ、お母ちゃん。」

母親は言います。「しっかりおし。吐き出しちまうんだよ。後生大事にとっておくんじゃないよ。

いいかい坊や、吐き出すのは牛の肝でお前の肝じゃないよ。」

[みなし子の財産を費ってしまった人が、

弁償するのが辛い時は、

この寓話を適用したりします。]

35 過保護からの死

雌猿がやっこさっこ二匹の子猿を産みました。

でも二匹に対して公平な母親ではありません。

一匹は結局不幸を招く様な愛着から

興奮して胸に押し付け過ぎて窒息死させてしまいました。

もう一匹は余計で甲斐のないものとしてうっちゃっておいたものですから
人気の無いところへ言って、生きのびました。

多くの人の気質はこんなものです。

ですから友となるよりもいつも敵となっていなさい。

36 榊と蘆

風がもともと山に生えていた榊を吹き上げて

河へと落としました。[河は] 波を逆巻いて榊を流しました。

巨大な樹木はかつての人間のものでした。

[河の] 両側には多くの蘆が生えていて、

気楽に川岸の水を飲んでおりました。

榊には驚きの念が起きました。どうしてそんなに

細くて弱いもの倒れないのか、

これ程の榊が根こそぎにされたというのに、と。

賢くも蘆は言いました。「驚くことはありません。

あなたは風と闘って敗れたのです。

しかし私達は穏やかな気持ちで頭を下げるばかりです。

たとえそよ風が私達の頭をなでるだけであっても。」

蘆はこの様に「言いました」。この寓話が明かすところは、
強いものとは争わずに、譲ってしまうべきだ、ということです。

37 老牡牛と仔牛

仔牛が野原で軛もつけられずに解き放たれて、
犁の刃を引いて働いている牡牛に
言いました。「哀れだねえ、こんな苦勞に耐えているなんて。」
牡牛は黙って地面を耕作しました。
さて田舎の人々が神々に犠牲を捧げようとした時に、
老牡牛は遊牧へと軛から放たれ、
馴らされておらず役立たずの仔牛は綱で引かれ、
角を縛られ、祭壇をその血で満たされることになりました。
牡牛は仔牛に語って言いました。
「君が働かされなかったのは正にこのためなんだ。
若い君が老いたものに先んじているが、死ぬことでもだ。
君の首を擦るのは軛ではなくて斧なんだ。」

[賞賛は勤勉なものに、危険は怠惰なものへとゆきます。]

38 よそ者と身内の悪

樵達が野性の松を割り裂いて、
押し広げるべく楔を差し込みました。
後の仕事が容易になる様にするためです。

松は嘆いて言いました。「この最悪の楔の
母は自分だけれど、これの方が自分の一族ではない斧よりも
もっと癪にさわるわ。
私のあっちこっちに入ってきて割り裂くのだから。」

この寓話は私達皆に次のことを明かします。
外からの人間による災難よりも、
身内から出た災難程おぞましいものはありません。

39 仲裁の資格

河豚はいつも鯨と争っていました。
仲裁役としてそこへ来たのは蟹でした。
それは丁度、政治において無名の人が
争う君主達の状態を鎮めるようなものです。

40 下層の抬頭

背中 of 盛り上がった駱駝が流れの早い河を渡って
うんこをしました。うんこが
自分の前を流れてゆくと言いました。「まずいことをした。
後にあるべきものが前へ行ってしまった。」

[アイソーポスが語っているのは、
最低の人間が良い人達に対して権力を行使している都市のことです。]

41 無理な背伸び

蛇と同じ長さになろうとした蜥蜴が
背の真中から裂けてしまった、ということです。
[自分よりも] ずっと勝っているものを真似しようとすれば、
自分自身を傷つけるばかりで、何もできません。

42 お客のお帰り

或る人が犠牲祭を終えて町で正餐を催しました。
その人の犬が仲間の犬に出会い
その正餐に預かりに自分のところへ来る様に求めました。
仲間の犬が行きますと、料理人が脚をつかんで
塀越しに通りに投げ捨てました。
他の犬がお料理はどうだったかね、
と尋ねますと、言いました。「これよりいいことってあるかなあ。
何しろどうやって私を帰してくれたのか知らない位だから。」

43 誇らしきものの裏切り

足が速く見事な角を持った二歳鹿が
水面の静かな池の水を飲んでおりました。
水に映える自分の影を眺めて
蹄と脚については悩んでいたのですが、
角は美しいものとしてとても自慢に思っていました。
しかし大地を見守る報復はすぐ近く迄来ていたのです。
鹿は突然獵師が

網と鼻のよく利く犬を伴っているのを見ました。

それを見ると渴きをいやす間もなく

素早い足どりで大平原を越えてゆきました。

ところが木の繁った森に入りますと

角が繁みに絡んで捕らえられてしまいました。

「何ということだ」鹿は言います。「僕は惨めにも騙されていた。

というのも、恥じていた脚が僕を救ってくれたのに、

自慢の角が裏切ったんだから。」

君が判断を下す自身のことがらについて

先入見で確実だと想ってはいけません。

また逆に絶望したり、諦めたりしてもいけません。この様に

信じていたものが私達を時としてひっくり返すのですから。

44 敵の分断

三頭の牡牛がいつも一緒に草を食べていました。

獅子がこれらを得てやろうと見張っていたのですが、

三頭一緒では勝ち目はないと思っていました。

そこでまやかしの言葉や中傷を使って仲違いをさせ、

敵同志とさせ、それぞれを切り離してから

一頭ずつ容易に御馳走にしてみました。

もし何よりも安全な暮らしにしたいなら、

敵に信頼を置かず、いつも味方との仲を守ることです。

45 よそのものへの投資

神様が雪を降らしていた時、山羊飼いは雪を避けて

人の住んでいないほら穴へと

大雪で白くなった山羊共を導き入れました。

そこに角をはやした野性の山羊が

先に入っていたのを見出しました。

その群は彼が連れて来た山羊よりも、多く、大きく、立派でした。

山羊飼いは野生の山羊達に森から若葉を取って来て与えましたが、

自分の山羊は大いに飢えさせたままほっぽらかしでした。

空が晴れた頃、それらは死んでいるのに気付きました。

野生の山羊達はそこにとどまらずに、草も食べることでできない様な山の中の、

足を踏み入れ難い茂みへとわけ入ってゆきました。

このお笑い種の山羊飼いは、家へ

山羊を失い空手で帰ったのです。より良いものを期待して、

最初から持っていたものからも何の利益も得られませんでした。

46 過大な友人

鹿が森で暮らすうちに軽快な足が麻痺してしまい

平原の若葉の生い繁るところでじっとしていました。

幸いそこからはお腹がすいても十分な草を取ることができました。

そこへ様々な動物達が群をなして

お見舞いにやって来ました。鹿が気の良い隣人だったからです。

それぞれやって来ては、草を囓っては

〈病人のことなどは忘れて〉森へ帰ってゆきました。

鹿は病気からではなく飢えのために痩せ衰えて、

[鹿は鴉の四倍生きると言われているのに] 鴉の第二生すらも全うすることができませんでした。

友達さえ居なかったら、天寿を全うできたでしょうに。

47 連帯の強さ

老人の中に特に高齢な人がいましたが、

沢山の息子を持っていました。息子達に命じて

(命が終わろうとしていたものですから)

どこかにあれば、細い棒の束を

持って来る様に言い付けました。一人が束を持って来ました。

「息子達よ、力を込めて互いに束ねられた

棒を折ってみなさい。」

息子達は折ることができません。「それでは一本だけを

試してみないさ。」一本一本は簡単に折れたので

老人は言いました。「よいか息子ども、この様に

お前達全員が互いに心をつにしていれば、どんなに力が強くとも

誰もお前達を害することはできない。

しかしめいめいが意見を異にしていると、

この一本の棒と同じ様にそれぞれがやっつけられてしまうのだ。」

[人間にとって兄弟愛は最上のものです。

それは低い者をも高い所へと持ち上げるものなのですから。]

48 喜ばれない崇敬

道ばたに方形のヘルメース像が立っていました。

その足許には石が積み上げられていました。そこへ犬が
やって来て言いました。「先ずは御挨拶申し上げます。ヘルメース様。
次はあなた様に聖油を注ぎたく存じます。あなた様の様な
神様、つまり運動の神様をやり過ごすことはできませんから。」
像は言いました。「既に注がれているわしの
聖油を舐めたり、小便をかけたりしないでくれ。
そうすればお前に感謝しよう。それ以上の敬意は払わんでよい。」

49 運命の女神の責任

労働者が夜にうっかり知らずに井戸のすぐ傍で
眠っておりました。運命の女神が夢枕に立って
声が聞こえるようでした。「これこれ、目を覚まさないか。
お前が井戸に落っこちて、人間共から私のせいだと
言われたり、悪い評判を立てられてはいやだから。
大体人間共は何でもまとめて私に責任をなすりつけるのだから。
たとえ自分から招いた失敗や災難すらをも。」

50 裏切り行為

狐が逃げていました。逃げる狐の背後を
猟師が走っていました。疲れた狐は
樵を見ました。「あなたの救済者である神々にかけて

あなたが伐っているポプラの木で私を隠して下さい。」
更に言います。「獵師にどうか言わないで。」
樵は裏切らないと誓いましたので、狐は隠れました。
獵師がやって来て、その人に尋ねました。
狐が隠れていないか、または逃げ去ったかと。
「おら見ていねえよ。」と言いつつも指は
悪党が隠れているところを指し示していました。
獵師はそれに気付かず、言葉を信じて、
去ってゆきました。差し迫った危険を免れた
狡猾な狐は生い茂ったポプラから覗いて、
齒をむき出して笑いました。老人は狐に
言いました。「お前は命を助けてもらったことでおらに借りがあるだ。」
狐は言いました。「全くその通り。俺はその証人だからね、
では、さいなら。お前さん誓いの神オルコスからは逃げられないぜ。
言葉は助けてくれたけど、指は俺を殺していたからな。」

[神たるものは賢くて惑わされることがありません。
嘘の誓いをまんまと立てたと思っても、誰も裁きを免れることはできません。]

51 毛を刈っても皮を切るな

やもめが家に羊を飼っておりました。
それからもっと沢山の羊毛を得たいと思って
不器用な手つきで刈ったのですが肉の近く迄

毛を切って傷つけてしまいました。

羊は痛いものですから言いました。「私を苦しめないで。

私の血などが如何程の利益になりましょうか。

もし私の肉をお望みなら、奥さん、

料理人にやらせて下さい。手早く私を殺すでしょうから。

もし肉でなくて羊の毛をお望みなら、

やっぱり毛刈人をお呼び下さい。私を傷つけないで刈ってくれますから。」

52 働き者と不平家

力のある牡牛が町に向かって

四輪荷車を肩で引いていましたが、そのうちの一頭が悲鳴を上げました。

牛飼いは怒って、

近づいて聞こえる様に言いました。

「持っているもののうちで一番悪いぞ。どうしてお前は

他の牛が黙って肩で運んでいるのに、泣き声を上げるのか。」

[他の者が一生懸命働いているのに、まるで自分だけが苦労している様に
大声で呻くのは、良くない人のすることです。]

53 三つの真実語

一匹の狐が不幸にも狼に出会ってしまい

命を助けて、年寄りを殺さないで、と頼みました。

狼は言います。「もし俺に三つの真実を語るなら、

牧神パンにかけてお前の命は助けてやろう。」

狐の答。「先ず第一は、あなたが私に出会わなければよかったのに。」

次に、私に出会ってもあなたが目が見えなければよかったのに。
その中の三つめは、あなたが私に再び出会うことのないように
一年も生き続けませんように。」

54 諾と否

宦官が子供について知りたく思い
臓物占い師の所へ行きました。占い師は聖なる肝臓を広げて言いました。
「これを見ると、あなたは父親になれるだろうと思いますが、
あなたの顔を見ると、とても人間とは思えませんな。」

55 臨時の仲間

或る人が牛を持っていて、驢馬と繋ぎ合わせて
耕作をしましたが、これは貧しくとも必要に迫られていたからでした。
仕事が終わって、二頭を離そうと
した時に驢馬は牛に尋ねました。
「じいさんのために道具を運んでやるのは誰だい。」
牛が驢馬に言いました。「いつもしてる奴さ。」

56 良い子品評会

全動物に良い子供の品評会を
ゼウスが催して、判定しようと皆をよく観察しました。
可愛い子の母親ですと一匹の猿もやって来ましたが、
胸に抱いていたのは鼻ぺちゃの裸の小猿。
それを見た神様達は思わず笑い出します。
母猿は言いました。「ゼウス様が優勝者をお決めになるのですけど、

私にはうちの子が皆の仲で一番可愛いんですよ。」

[このお話は次のことを皆に伝えていると思います。
誰でも自分の子が可愛いと考えていると。]

57 嘘つきアラブ人の由来

ヘルメースが嘘の車に

多くの欺瞞とあらゆる悪事を積み込んで

大地の上を駆って、部族から部族へと

少しずつ移動し、品物を少しずつ

それぞれに分け与えておりました。アラブ人の

国にやって来て、通り過ぎようとした時、

車が突然壊れて

止まってしまったと言うことです。人々はまるで

商人の高価な積荷であるかのようにして奪い取り

車を空にして、まだこれから行くことになっていた

人達の所へ行けなくしてしまいました。

それだからアラブ人は、よく知る通りですが、

嘘つきで、詐欺師なのです。彼らの語るところには、

一言の真実もありません。

58 希望

ゼウスが甕の中にすべての有益なものを詰め込んで

蓋をして人間の中に置きました。

自制心のない人間はその中に何があるか

知りたくて仕方ありません。蓋を取りますと
有益なものどもは神の住まいへ向けて散ってゆき、
そこで飛んで、地上のはるか上に去って行きました。
ただ希望だけが残っていました。蓋が
捕まえて止めたからです。それだから希望だけが
人間と共にあって、逃げ去った良いものの
一つ一つを私達に与える約束をしてくれているのです。

59 あら探し屋

語られるところでは、ゼウスとポセイドン更に
アテーナーの三人が、誰が美を創るかを競いました。
ゼウスは生きものの中でも傑出した人間を
創りました。パラス（＝アテーナー）は人間のために家を、
ポセイドンは牡牛を創りました。三人により非難の神モーモス
が審判として選ばれました。まだ神々の間に住んでいたからです。
彼は元々みんなを嫌っていたので、
先ず直ぐに牡牛に難くせをつけました。
突くところが見えるように角が眼の下に
ついていないではないかと言うのです。人間については
何を考えているのか隣人に示すことができるような
開き戸が胸についていないね、と言います。
家についても、旅に出る家の主人が他の町に
移動できるような鉄の車輪が
基台についていないではないか、と言うのです。

[この寓話はお話の中で何を言っているのでしょうか。

一生懸命何かを創っても、〈妬み〉に判定させてはいけないということです。

あら探し屋が完全に気に入るというものはないのですから。]

60 美食の危険

鼠が蓋のない壺に落ちてしまいました。

油で息が詰まり、もはや息も絶え絶えです。

言うには「贅沢にも心ゆくまで

食べたり、飲んだりしたんだけど、おいらには死の時が来てしまった。」

[人間の中にあって君も食い意地の張った鼠になってしまいますよ、
もし美味しくても有害なものを避けないならば。]

61 習慣への回帰

猟師が猟を終えて山から戻って来ました。

漁師が魚で一杯の魚籠を持って戻って来ました。

偶然にも二人は互いに出遭いました。

猟師は海を泳いでいた魚を、

漁師は野の獲物を欲しくなり

交換しました。こうして得たものを次に

いつも売って、〈その儲けで〉より良い食事をしました。

すると或る人が言います。「せっかくの良いものを

君達はあれこれやって駄目にしちまってる。

結局二人共前に持っていたものをまた求めるんだろうから。」

62 雑種

怠けものの騾馬が飼葉槽の秣を食い尽くして、
大麦をたらふく食べて走り出し、
臄を揺さぶって声を挙げました。「僕のお母さんは馬なんだぞ。
僕も競争ではお母さんより遅くはないぞ。」
しかし突然競争を止めてうなだれたのです。
すぐに父親が驢馬であることを思い出したからでした。

63 英雄崇拜

信心深い人の家で英雄像が
中庭に祀られていました。そこで信者は犠牲式を行ない、
祭壇の周りを浄め、葡萄酒を注ぎかけ、
祈るのが常でした。「南無、英雄中の最も親愛なるお方、
あなたの同居者をお金持ちにしてください。」
英雄は真夜中に彼に言いました。
「よいかお前、財産とは英雄のうち一人として
与えるものではない。それは神々にお願いするがよかろう。
英雄とは、人間と共に在るすべての悪を
お前達に与える者なるぞ。それだから悪を望むなら
祈れ。お前が一つだけを望んだとて、沢山与えてやろう。」

64 樅の木と木莓

樅の木と木莓が互いに言い争っておりました。
樅の木は色々と自分を讃め称えます。

「私って美しいし、丈も高いし、
真っ直ぐ伸びて〔頭は〕雲に届く程だわ。
家の大黒柱にもなるし、船では竜骨。
茨さん、あなたはたこんな木と較べることができて。」
木苺は樅に答えました。「いつもあなたを切り刻む
斧のことを思い浮かべたなら、
むしろ木苺でありたいと思うでしょうよ。」

どんな勝れたものも劣ったものより大きな
名声を持ちますが、またより大きな危険をも合わせ持つものです。

65 鶴と孔雀

灰色の鶴が金色の羽を
ゆすっている優美な孔雀と言い争いをしていました。鶴は言います。
「君がその色を嘲笑うこの羽でもって、僕は
星やオリュムポスの近くに迄飛ぶことができる。
君は鶏のように地面の上で
黄金の羽を羽搏かせるばかりじゃないか。」更に言います。「上空には決して現れないしね。」

豪華な装いによる名声をもって生きるより、
優れた〔装備を〕もって賞讃される方を私は望むのです。

66 二つの革袋

プロメーテウスは神々のうちの一人ですが、最初期の一人でした。

彼が生きものの長である人間を土から
造ったと言われています。また伝えられているところでは、人間は
人間の悪徳で一杯の二つの革袋を
ぶら下げているということです。前の袋には他人の罪
後の袋には自分の罪が入っているのですが、こちらの方がより大きい。
だから私には思えるのです、他人の罪は、
よく見えるのだけど、自分の罪には一向に気が付かないのだと。

67 獅子の取り分

野生の驢馬と獅子が共同で狩りをしました。
獅子は力に、驢馬は足に秀でていました。
多くの獲物を得た時に、
獅子は分割して、三つの部分にしました。
そして言います。「第一の部分はわしが取る。
わしは王だから。第二の部分はわしが取る。
同じ仲間として。第三の部分についてじゃが、
お前が逃げようと思われないと、面倒なことになるぞ。」

自分自身の値踏みをしなさい。自分より強い人間と
一緒に仕事をしたり、仲間になってはいけません。

68 弓競技

アポローンが遠矢を飛ばしながら神々に言いました。
「誰も俺様より遠くには飛ばせまい。あのゼウスだって。」

ゼウスは遊び半分でポイボス（＝アポローン）と競うことになりました。

ヘルメースがアレースの兜の中で籤を回しました。

籤を引き当てた。ポイボスが黄金の弦を

満月の様に引き絞って先ず鋭く放ち、

矢をヘスペロスの庭の中迄飛ばしました。

次はゼウスが同じ距離を股を広げて立って

言いました。「どう射ればよいのか、息子よ。わたしには〔射る〕場所がないぞ。」

〔ゼウスは〕射ることなく弓競技に勝利を収めたのでした。

69 我が身のための疾走

狩りの経験が浅くない犬が繁みから

足に毛の生えた野兎を駆り立てて追いましたが、

走りで遅れを取ってしまいました。山羊飼いがからかって

言いました。「お前より速かったのはどれほどちっちゃいものだったんだい。」

犬は答えます。「他のものを捉えようと急ぐものが、

自分を危険から救おうとするものより速く走れますかね。」

70 傲慢と闘い

神々が結婚して、それぞれが伴侶と結ばれた時、

皆に遅れて最後に籤を引いた^{ポレモス}闘いの神は

^{ヒュプリス}傲慢の女神を嫁にしました。彼女だけが残っていたからです。

夫の新妻への愛し方は異常であると言われています。

今でも彼女の行くところどこへでも付いてゆくということです。

人の集まりにも市にも

傲慢^{ヒュプリス}の女神を来させてはなりません。彼女が市民達に微笑みかけると、その直ぐ後ろには闘^{ボレモス}いの神が来ているのですから。

71 悪の真の原因

お百姓は船乗りの一杯載った船を

弓状にうねった波が舳から沈めるのを見て

言いました。「ああ、海よ、どうかもう航海がありません様に、人類の無慈悲な敵である基体の上を。」

これを聞いて海は、女の

声をして言いました。「私を責めないで下さいな。

だって私がその原因ではないのですから。

嵐を起こすのは風なんです。私はその間にいるだけ。

風のない時に私を見て航海してみて下さい。

あなたの「住んでいる」大地より私の方が優しいことがわかりますから。」

誤った使用は本来役に立つ多くのものを、

悪く見える様に劣ったものにしてしまいます。

72 借りものの装い

ある時、天からの赤紫色の使いであるイーリスが

鳥達を対象とした美しさを競い合う会が神々の住居いで

開かれることを告げました。知らせは忽ち皆に伝わり、

すべての鳥が神様からの賞品を獲得したいと望みました。

山羊も通れないような岩場から泉が流れ出ていて、

水は夏の様相をたたえ澄んでおりました。

そこへあらゆる種類の鳥がやって来て

自分の顔や脛を洗い、

翼を揺り動かし、冠毛を梳きました。

その泉へ鴉の息子である老いたこくまる鴉

もやって来ました。あれこれの鳥の

羽を〔拾っては〕自分の濡れた肩に着けて

ひとり色取り取りに飾り立てました。

こうして神々の許へ驚よりも颯爽と飛んでゆきますと、

ゼウスも驚嘆して、優勝を与えるところでした。

ところが燕が先頭に立ってアテネ生まれのものとしてこくまる鴉の

羽を引っこ抜いて正体を暴いたのです。

こくまる鴉は燕に言いました。「私の正体をばらさないで。」

続いて雉鳩が引っ掻き、更には鷓、

かけす、墓場で遊んでいた雲雀、

雛鳥を待ち伏せしていた鷹

などなども〔襲い掛りました〕。こうしてこくまる鴉であると知られてしまいました。

〔子供よ、自分は自分自身の装いで飾りなさい。

他人の装いで目立っても剥ぎ取られてしまいますから。〕

73 鳶の鳴声

鳶は〔元々は今とは〕違う高い鳴声をしていました。

馬が見事な調子で嘶くのを聞いて
馬を真似したのですが、望んだ様な良い声も
得られず、元の声も失くしてしまいました。

74 人の一生の区分

馬と牛と犬とが寒さに
打ち拉がれて、人間の家へとやって来ました。
人間はそれらのために戸を開けて
中に入れてやり、火を一杯に焚いた炉を
温めてやるべく前に置いてやりました。あるもののうちから
大麦を馬に、えんどう豆を役牛に与え、
犬は自分と一緒に食事をさせました。
好意へのお返しとして動物達はその人に、
自分らが生きている年を分割して与えました。
馬は直ぐの [年を与えました]。それだから若い時期は
私達は皆思い上がったところがあるのです。
牛はそれに続く [年を与えました]。それ故に中年の頃になると
苦勞が多く、働き好きで富を集める様になります。
犬は最後の方 [の年] を与えたと言われています。
だから、ブランコスよ、年を取ると誰でも不機嫌になり、
食物をくれる人にだけ尻尾を振り、
いつも吠えて、見知らぬ人を好きになれないのです。

75 藪医者

藪医者がおりました。誰もが病人に

「心配には及びません。治りますよ。病気は長びいていますが
快方に向かうでしょう。」と言いますと、

「藪医者は割って入って言います。」

「私はあなたを騙したり、欺いたりしません。

あなたはすべての準備をしなくてはなりません。あなたは死ぬのですから。
明日迄待つことはないでしょう。」

こう言うとそれから後は二度と来ませんでした。

時が経つとその病人は病気が治って

蒼白いながらもどうにか歩ける様子で外に出て来ました。

藪医者がその人に出会って言いました。「やあこんにちは。」

それから冥界の人達はどうかね、と尋ねました。

彼は答えました。「レーテーの水を飲んで

変わりありません。ところでコレー（＝ペルセポネー）と偉大なプルーツスが
近頃すべての医者に対して恐ろしい脅しをかけています。

というのも彼らは病人が死ぬことを許さないからです。

全部登録されているのですが、最初の方に

たしかあなたの名前があった様でした。私は心配になって

直ちに行って杖に手をかけて

誓ったのです。あなたは本当は

医者ではなくって、間違っって非難されているのです、と。」

76 騎士と馬

ある騎士が戦争が続いている間は、
馬を戦場における高貴なる戦友と見做して、
秣で養っておりました。

しかし [戦争が] 止んで平和が残りますと、
騎士は国から給金を貰えなくなりましたので、
その馬は屡々森から

太い丸太を町に向かって運んで行きました。
給金のためにあれやこれやの荷物を運んで、
哀れな粃穀で糊口を凌いだのです。

背中に着けた鞍はもはや馬のものではありませんでした。
再び別の戦争が城壁の前で [起こったのが] 聞かれた時、
喇叭がすべての者に、盾を磨き、
馬は装備をし、鉄器を研ぐように、と告げました。

主人は再び馬に銜をふくませ
騎乗して進もうとしました。

しかし馬は最早力なく膝を折って蹲りました。
馬は言います。「御自分で歩兵团に入ったらどうです、重装歩兵にね。
あなたら私を馬から驢馬に落としてしまったのですから、
どうして再び驢馬から馬へ戻ることができますかね。」

77 狐と鴉

鴉がチーズを口にくわえて [木に] 留まっていました。
狐がそのチーズをせしめてやろうと思って

次のような言葉で鳥を騙しました。

「鴉さん、君の翼は綺麗だねえ。眼光も鋭い。

項は見るに美しい。驚の様な胸をしていらっしゃる。

爪はどんな獣にも打ち勝つ程です。

そんな鳥がものも言わずに、鳴かないでいるとは。」

鴉はお世辞に心がのぼせ上がって、

口からチーズを落としてカアと鳴きました。

チーズをせしめたずる賢い狐は嘲笑って

言いました。「声がでないんじゃないかなかったですね。いい声ですよ。

鴉さん、あなたは何でも持っていらいっしゃる。脳味噌以外はね。」

78 泥棒の神頼み

病気の鴉が泣いている母親に言いました。

「泣かないで、お母さん。恐ろしい病気と苦しみから

治して下さいよう神様達にお願いして下さい。」

母は言います。「でも坊や、神様のうち誰が助けてくれるでしょうね。

お前が盗みを働かなかった祭壇があるかえ。」

79 犬と影

犬が調理場から肉を盗み出し、

川迄やって来ました。水の流れの中に

もっと大きい肉の影を見て、

肉を放り出して、影に向かって突進しました。

しかし影〔の肉〕を見出すことはできず、得ていた〔肉〕も〔失ってしまいました〕。

お腹を空かせたままもと来た道に戻ってゆきました。

[あらゆる貪欲な人の生活とは不確実なものです。

あるものへの希望を抱きながら無益に費やされてゆくのです。]

80 駱駝と舞踏

酒を飲んだ主人が駱駝に

笛と青銅のシンバルに合わせて踊るように強要しました。

駱駝は言います。「おいらがなりたいのは、

笑われないで道に行くことであって、踏び跳ねて踊ることじゃないよ。」
(つづく)